



Title	イスラーム黎明期における女性指導者像：偽預言者サジャーフの例から
Author(s)	洪, 砺
Citation	EX ORIENTE. 2024, 28, p. 65-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎論文

イスラーム黎明期における女性指導者像

——偽預言者サジャーフの例から——

洪 砺

1. はじめに

(1) 先行研究

イスラーム研究、特に歴史研究においては、イスラーム黎明期¹のアラビア半島における女性の地位に焦点をあてた研究が数多くなされてきた。その中では、特に女性の政治的役割についてさかんに議論がなされている²。しかし一編の論文あるいは一冊の書籍の中で同時に複数の女性を扱う傾向が強いため、分析が巨視的なレベルにとどまっており、一人の女性にとって社会環境はどうであったのか、社会において彼女がどのように振る舞ったのかについて十分な検討がなされていないと思われる。

632年6月、預言者ムハンマドがこの世を去った [al-Ṭabarī 1969: 199-200]。彼の死をきっかけに、アラビア半島の数多くのアラブ部族がイスラーム共同体に反旗を翻した [Shoufani 1973: 49-70]。その際の反乱を起こした指導者の中に、サジャーフ (Sajāh) という女性偽預言者がいる。女性指導者像を描く研究において、サジャーフは好例の一つとされ、Abbott [1941b] および al-Hawfi [1963: 437-439] などの研究者に言及されている。ところが、先行研究の多くは彼女をめぐる史料の細部を述べきっていない。

本稿では、サジャーフに関する史料の整理と分析を通じて、サジャーフにみ

られる女性指導者像を再考し、イスラーム黎明期のアラビア半島における女性の政治参加状況の一面を具体的に提示することを試みたい。

(2) 史料

サジャーフの反乱を比較的詳細に記しているのは、タバリー³ (al-Ṭabarī, 839-923 年) [1969: 267-275] の『諸使徒と諸王の歴史』(*Tārīkh al-Rusul wa-l-Mulūk*)、バラズリー⁴ (al-Balādhurī, 892 年頃没) [1987: 138-139] の『諸国征服史』(*Futūḥ al-Buldān*)、イスバハーニー⁵ (al-ʿIṣbahānī, 897-967 年) [1960: 35-37] の『歌謡の書』(*Kitāb al-ʿAghānī*)、イブン・アスィール⁶ (Ibn al-ʿAthīr, 1160-1233 年) [1965b: 353-357] の『完史』(*Al-Kāmil fī al-Tārīkh*) およびイブン・カスィール⁷ (Ibn Kathīr, 1300 頃-1373 年) [2007: 28-30] の『始まりと終わり』(*Al-Bidāya wa-l-Nihāya*) である。

これらのうち『完史』及び『始まりと終わり』は『諸使徒と諸王の歴史』をはじめとするそれ以前の史料の引き写しに終始しており、記述がほぼ一致している。そのため本研究では、より早くに成立し後世の史料によって参照されている『諸使徒と諸王の歴史』、『諸国征服史』および『歌謡の書』を主要史料として扱う。

2. 名前と系譜

サジャーフという名前を構成する語根は s・j・ḥ である。中世アラブの代表的辞典の『アラブの言葉』(*Lisān al-ʿArab*) によれば、この語根は柔らかい頬や綺麗かつ端正な顔などの意味を表している [Ibn Manẓūr 1955: 475-476]。なお、彼女の名前は正式にはサジャーヒ (Sajāḥī) であるが⁸、語尾は一般的に省略されるため本稿においてもサジャーフを用いる。

サジャーフの系譜について、文献の記載は一致していない。タバリー [1969: 269] によれば、サジャーフの系譜はサジャーフ・ビント・ハーリス・ブン・スワイド・ブン・ウクファーン (Sajāḥ bt. al-Ḥārith b. Suwayd b. ʿUqfān) であ

る。しかし、同時代のバラズリー [1987: 138] は、上述した系譜のほか、サジャーフ・ビント・アウス・ブン・ヒック・ブン・ウサーマ・ブン・ガニーズ・ブン・ヤルブーウ・ブン・ハンザラ・ブン・マーリク・ブン・ザイド・マナート・ブン・タミーム (Sajāḥ bt. 'Aws b. Ḥiqq b. 'Usāma b. al-Ghanīz b. Yarbū' b. Ḥanzala b. Mālik b. Zayd Manāt b. Tamīm) という系譜も記している⁹。

サジャーフの母はタグリブ (Taghlib) 族に属し、彼女の父はタミーム族に属する。反乱を起こす以前、ジャズィーラ地方¹⁰ (al-Jazīra) における母方部族で日々を送ったと言われている [al-Ṭabarī 1969: 269 ; Vacca 1995: 738]。632年、ムハンマドが没した。タミーム族の中には、彼の死をきっかけにイスラーム共同体への税 (zakāt) の納付を拒否し始め、反乱を起こした人がいた。また、ムハンマドの後継者のアブー・バクル (Abū Bakr) へ納税し続ける人もいた。さらに、納税しようかしまいかためらって事態を観察している人もいた。意見の分裂と利益の対立はタミーム族の内乱を引き起こした。タミーム族がこのような状況に陥っているなか、預言者を自称するサジャーフがタグリブ族の一部を伴ってジャズィーラ地方から突然タミーム族のところに現れ、内乱を調停し、反乱戦争へと導いた。

3. カーヒナ、偽預言者および女性指導者

古代社会における王朝や共同体の指導者はしばしば宗教的指導者と政治的指導者の両面を兼ね備えている。アラビア半島も例外ではない。偽預言者となる前には、サジャーフはカーヒナ (kāhina) だったと言われている [Abbot 1941b; al-Balādhurī, 1987: 138; al-Tha'alibī¹¹, 1985: 315]。カーヒナはカーヒン (kāhin) という単語の女性名詞の形である。『アラブの言葉』によれば、カーヒンとは未来の存在についての情報を扱い、秘密を知っていると主張する人である¹² [Ibn Manẓūr 1956: 363]。ゆえに、カーヒン／カーヒナは占い師あるいは男巫／巫女と訳せよう。Fahd [1997] はカーヒンという言葉の語源について争論があると述べている。彼によれば、西セム人にとってカーヒンとは部族の

名義で神に犠牲を捧げ、神の前に部族を代表し、神の意思を解説して伝える人である。この言葉はカナン諸語、アラム語およびアラビア語の伝統に属する。したがって、セム人においてカーヒンは長い歴史を持っている職業であると思われる。

ジャーヒリーヤ時代において、カーヒン／カーヒナは占いを通じて未来を予測し、占いの結果に基づいて部族の有力者と部族民を指導する役割を担った。例えば、マアリブダムの崩壊を予言した名カーヒナのタリーファ (Ṭarīfa) が挙げられる。タリーファは占いを通じ、マアリブダムの崩壊による洪水を予見し、韻文¹³を詠み、アズド族 (al-ʿAzd) の有力者であるアムル・ブン・アーミル (ʿAmr b. ʿĀmir) に警告した。

サジャーフはタリーファと類似したカーヒナの役割を果たしてきた。ムハンマド没後、サジャーフは預言者を自称し始めた。彼女とラビーア族¹⁴ (Rabīʿa) の指導者たちはアブー・バクルを襲おうとしてタミーム族のところに到った。盟友を増やすために、サジャーフはタミーム族の有力者であるマーリク・ブン・ヌワイラ (Mālik b. Nuwayra) のもとへ手紙を送り、彼の加盟を要請した。だが、その時点のマーリクは、イスラーム共同体の敵になることに興味を持たず、サジャーフにまずタミーム族を統一しようと呼びかけた。サジャーフは次のように返事し、マーリクの提案を受け入れた。

ええ、貴方は正しいと貴方が思う人と一緒にやればいい、私はヤルブーウ¹⁵族 (Yarbūʿ) の一人の女にすぎないので、もし、ここに統治権があるとなれば、それは貴方たちのものです [al-Ṭabarī 1969: 269]。

さらに、サジャーフはマーリク族へ手紙を送り、マーリク族¹⁶ (Mālik) の部族民の加盟を誘った。マーリク族の指導者であるワキーウ・ブン・マーリク (Wakīʿ b. Mālik) は快諾した。結果として、サジャーフ、マーリクおよびワキーウは同盟を結成した。同盟の人々はアウフ族¹⁷ (ʿAwf) やリバブ族¹⁸ (al-Ribāb) などのタミーム族傘下の支部族を列举して、これらの部族のうちど

の部族から攻撃し始めるのかとサジャーフに尋ね、サジャーフは韻文で次のように答えた。

乗り物を用意せよ、略奪のために準備せよ。リバーブ族を攻撃しろ、彼らの前に遮蔽物¹⁹は無かろう²⁰ [al-Ṭabarī 1969: 270]。

サジャーフ一行がアフファール (al-'Aḥfār) につき、彼女はまた韻文を使い、野営地の選択結果と理由を人々に伝えた。その後、サジャーフ、マーリクおよびワキーウの同盟はリバーブ族を攻撃しようとする戦いで2回の敗北を喫して解体した。このような事態に直面し、ジャズィーラ地方の指導者たちは集まり、次の計画についてサジャーフに聞いた。サジャーフは次のように答えた。

ヤマーマ²¹ (al-Yamāma) へ行こう、鳩の如く翼を羽ばたかせよう。厳しい戦いなので、お前らが責められることは無かろう。

科学が発達していない古代社会において、人々は身の回りに起こった現象を超自然的な力で解釈しがちである。そのため彼らは自分の運命が超自然的な力によって左右されると考え超自然的な力を崇拝し始めた。それによって、このような力と一般人の間の仲介者であるシャーマンや司祭も権威を持ってきた。紀元前からジャーヒリーヤ時代にわたって、アラビア半島は、政権と神権を同時に握る女性指導者を輩出した [Abbott, 1941a, 1941b]。サジャーフも宗教と政治の両面を一体とする女性指導者かのように見える。彼女は占いを通じて未来を予知し、部族の人々を指導した。部族の人々も彼女の権威を認めて指示にしたがった。ただし、宗教的指導者であり政治的指導者でもあるサジャーフが実際に有している権力は絶対的権力ではない。サジャーフがヤルブーウ族の指導者であるマーリクへ送った手紙の内容をもう一度確認してみよう。

手紙において、サジャーフは自分が女にすぎず、統治権はマーリクのものだと強調した。すなわち、この手紙でサジャーフは女にすぎない自分の代わりに

マーリクのほうが主導権を握ると示唆している。また、進軍路線の調整も真の主導者はサジャーフではなく、マーリクであることを表している。最初サジャーフをはじめとする反乱勢力の目標はイスラーム共同体であったが、有力者のマーリクの求めに応じて、目標をタミーム族内部の平定へと変更された。さらに、サジャーフの占いによる攻撃部族の決定は、同盟の人々が列挙する選択肢によって制限されたものであるため自由度が低い。2回の敗北を喫して同盟が解体してはじめて、サジャーフは主導権を握って自由に進軍路線を選べるようになった。

なぜならば、マーリクはヤルブーウ族の有力な指導者である。長年にわたってヤルブーウ族に君臨するマーリクは突然タミーム族のところに現れたサジャーフよりヤルブーウ族において権威を持っている。また、サジャーフはヤルブーウ族に属しているため、部族の成員として部族の指導者にしたがわなければならない。その上で、サジャーフは神権を持つものの、同盟を維持しようとすれば、主導権をマーリクへ譲らざるを得ない。サジャーフが自分はヤルブーウ族の一人の女にすぎないと強調することについて、二つの意味が考えられる。第一に、イスラーム黎明期において、女性の地位は男性より低い²²ため、マーリクに謙遜の態度を見せ、彼の機嫌をとり、同盟関係を強化した。第二に、サジャーフは自分がヤルブーウ族の女性である、言い換えれば自分もヤルブーウ族の成員であるという事実を述べている。同じ部族に属することを利用し、同盟関係を強化した。

サジャーフに権威をもたらしたのは、女性という性別ではなく、偽預言者の身分およびカーヒナの能力である。換言すれば、女性であるかどうかにかかわらず、カーヒン／カーヒナの身分を利用すれば、地位を上げ、権威を得られる。つまり、サジャーフのようなカーヒナである女性指導者に関する史料は、一部の女性が高位を占めて重要な役割を果たしたということを証明するというより、カーヒナが高位を占めたと言ったほうが正しい。ただ、サジャーフは女性であるという自分の不利な条件を利用し、目的を果たすための道具にした。サジャーフの手紙にはイスラーム黎明期におけるアラブ女性の知恵と手腕が表

れている。

4. ムサイリマとの政略結婚

サジャーフとムサイリマの面会について、タバリー [1969: 282-283] は異なる情報源に依拠して2種の経緯を伝えている。サイフ・ブン・ウマル²³ (Sayf b. 'Umar, 789-809年頃没)によれば、サジャーフは主導権を握った後、ムサイリマの所在であったヤマーマ地方へ進軍した。ムサイリマはサジャーフ軍との争い中に、第三者である他の部族がこの争いを利用して利益を得ることを恐れた。この局面を避けるために、ムサイリマは贈り物と手紙をサジャーフに送った。手紙においてムサイリマはサジャーフと面談したい意を表した。また、彼はもし交渉するためにサジャーフのところに到れば、サジャーフが彼の安全を保証しなければならないことを求めた。サジャーフは快諾した。保証を得たムサイリマは40人の代表団を導いてサジャーフと会った。ムサイリマは次のように言った。

もともと、土地の半分は（ハニーファ族の）我らのものであり、クライシュ族（Quraysh）が正しいことをやればほかの半分は彼らのものとなる。クライシュ族が受け取れるならば、彼らのものとなるが、彼らは断った²⁴。神様はその半分以上を貴女に戻され、貴女に賜われた。

サジャーフは韻文で「（ハニーファ族の）人が認めないと土地は戻されない。なので、貴方が見た騎士へこの半分の土地を持って行きなさい。彼らは喉が渇いで死にそうだった」と返事した。この後、ムサイリマはクルアーンのような長い韻文を詠んだ。

タバリー [1969: 282-283] はサイフ以外の情報源に準じて上述した展開と少々異なった物語も伝えている。サジャーフがムサイリマのところに到った。ムサイリマはサジャーフの目の前で要塞を閉鎖した。それを見たサジャーフは

ムサイリマに要塞から出てくるように求めた。ムサイリマは「貴女の仲間を貴女から遠ざけてください」と言った。サジャーフは言われたようにした。そして、ムサイリマは部族の人々にテントを張るように命じ、テントのなかに沈香を多量に焚いた。彼はテントに膨大な量の香料と香炉を用意するようにも命じた。ムサイリマによると、女がいい香りを匂えば、彼女の情欲はそそられる。しもべらは彼がいう通りに準備した。サジャーフがテントに入った途端、ムサイリマは「何が貴女に啓示されたか」とサジャーフに聞いた。サジャーフは即座に「通常なら女から始まるのか、貴方から始まろう。言いなさい、何が貴方に下されたか」と問い返した。ムサイリマはクルアーンにおける韻文を模倣して「アッラーは女らを陰部として創り、男らを彼女たちの夫に成させる。(男の)我らは巨大なそのもので彼女たちに挿し、我らが望むときに抜き、彼女たちは我らのために子供をみごもる」という内容などを答えた。ムサイリマの返事を聞き、サジャーフは「私はあなたが預言者であることを証言する」といった。さらに、ムサイリマは「私が貴女を娶ることは望ましいか。私の部族民と貴女の部族民と一緒にアラブ人を征服しよう」とサジャーフに聞いた。サジャーフは受けた。ムサイリマは詩を次のように詠んだ [al-ʿIṣbahānī 1960: 36; al-Ṭabarī 1969: 273]。

交わろうではないか、寝床は貴女のためにすでに用意されたので。

貴女が望めば家です、あるいは貴女が望めば秘密な小部屋です。

貴女が望めば我らは貴女を回して背中からする、あるいは貴女が望めば四つ這いです。

貴女が望めばその三分の二です、あるいは貴女が望めばその全部です。

その後、サジャーフはムサイリマのもとに3日間滞在した。そのあと、彼女は部族に戻った。部族民は「貴女はどう思うのか」と聞き、彼女は「彼が正しい。私は彼に嫁いだ」と返事した。部族民は「彼は結納金として何を貴女に与

えたのか」と質問し、彼女は「ない」と答えた。部族民は「彼の元へ戻ってください。貴女のように結納金をもらわないまま戻ることは不名誉だ」と言った。そのため、サジャーフはムサイリマのもとに戻り、結納金を求めた。ムサイリマはアッラーからの啓示と称するものを結納金としてサジャーフに送った。

イスバハーニーもタバリーによる2番目の物語と類似した物語を伝えている。ただし、サジャーフとムサイリマの面会の前の手紙について、イスバハーニー [1960: 35-36] は次のように記している。

ムサイリマはサジャーフが軍を率いてヤマーマへ来たと知ったあと、サジャーフへ次のような手紙を送った。「最高、至高のアッラーは啓示を貴女に下され、私にも下された。アッラーが我らに啓示された内容を知り合うために、我らは早く会いましょう。我らの中の真理を知る人に追随しよう。我らは集まろう。私の部族民と貴女の部族民と一緒にアラブ人を征服しましょう」という。

なお、イスバハーニーは上述した物語がサイフ以外の情報源によって伝えられたものと明言していない。1つ目の伝承には問題がないように見えるが、2つ目の伝承には疑わしい部分がある。イスバハーニー [1960: 35-37] はこの物語を伝える際に、テント内に傍観者がいるかどうかについて言及していない。一方、タバリー [1969: 273-274] の場合は、サジャーフの部族民はテント外にとどめられ、ムサイリマの部族民の20人がテント内にいたと伝えている。サジャーフの政治経験が足りないといえども、彼女に同行する他の指導者の全員がこの不平等を認めるとは思われない。この不平等のほか、Abbot [1941b] は、ムサイリマによる淫らな詩を詠んだ及び結納金を与えなかったという行為はサジャーフに対する侮辱と言えるため、このような展開は全くばかげたこと (utter nonsense) であると述べている。al-Hawfi [1963: 354] によれば、ジャーヒリーヤ時代のアラビア半島の人々は男女問わず貞節を重要視しており、貞節

を誇っていた。そのため、少数の詩人を除き、露骨な表現で求愛することをしなかった。al-Hawfi の観点にしたがえば、淫行としての性交体位を議論する淫詩はサジャーフの貞節に対する侵害となったはずである。また、ジャーヒリーヤ時代に、結婚に際しては男側が結納金を多様な形で女側に与えることになっていた。それにもかかわらず財力のあるムサイリマがサジャーフとの結婚に際して何も与えなかったというのはサジャーフに対する侮辱に他ならないが、そのような侮辱を行う合理的理由は見当たらない。またそのことについてサジャーフ自身が反発しておらず、部族民に促されてはじめて再交渉を行っているというのは不合理であるため、Abbot による全くばかげた展開であるという評価は頷けるものである。上述した展開は、イスラーム期に入ってから偽預言者であるサジャーフを敵視しながら、彼女の物語を記述した男性の書き手による意図的な歪曲である可能性が高いと考えられる。

ただし、詩と結納金をめぐる言説が疑わしい一方、サジャーフがムサイリマと結婚したことは否定できない。むしろ、可能性が高いとさえいえるべきである。なぜならば、イスラーム黎明期において、政略結婚は財産あるいは有力な同盟者を得る手段であった。例えば、ラフム朝の国王ヌアマーン・ブン・ムンズイル (al-Nu'mān b. al-Mundhir) の例が挙げられる。ヌアマーンはサーサーン朝の王ホスロー 2 世の秘書官のアディー・ブン・ザイド ('Adī b. Zaid) を殺した [Bevan 1908-1909: 639]。そのため、ホスロー 2 世はヌアマーンを殺せと命じた。ヌアマーンはバクル族有力者のハーニウ・ブン・マスウード (Hānī' b. Mas'ūd) のところに避難し、彼の支持を得るため彼に 2 人の娘を嫁がせ、自分の富と財産も彼に与えた。また、イスラーム黎明期において、政略結婚は衝突の双方が再び平和を得る手段としても使われている。例えば、ラフム朝の国王ムンズイル・ブン・マーウ・サマーウ (al-Mundhir b. Mā' al-Samā') はキンダ王国との紛争において、ペルシアの国王から十分な支持を得られなかったため劣勢に立たされた。そのため、ムンズイルはキンダ国王のハーリス・ブン・アムル (Hārith b. 'Amr) の娘を娶って、両王国の争いは収まった [Bevan 1907: 267]。

サジャーフがムサイリマの求婚を受けるならば、彼女による攻撃は停止するはずである。また、第三者である他の部族が双方の争いを利用して利益を得るという局面を避けることができる。その上で、サジャーフとの結婚を通じてタミーム族からの援助も得られる。同様に、サジャーフにとってもムサイリマとの結婚を通じてハニーファ族の援助を得ることができる。つまり双方とも、イスラーム黎明期の慣習に則る政略結婚によって膨大な利益を獲得することができる。このように政略結婚に関する記述は合理的に解釈できる。

5. サジャーフの退場

タバリ [1969: 275] によれば、ムサイリマはサジャーフにヤマーマ地方の歳入 (ghallāt) の半分を与え、条約を締結しようと提案した。サジャーフは彼が一年目の分を予め送らない限り、この条約を拒否するという姿勢を表した。ムサイリマは渋々同意し、「歳入を集めてくれる人を残して、今年の半分を自分で持って帰ってください」と言った。サジャーフはタグリブ族の指導者のフザイル・ブン・イムラーン (al-Hudhayl b. 'Imrān) などの3人を残し、自分がヤマーマ地方の半分の歳入を持ち、ジャズィーラ地方に戻った。661年までにタグリブ族の間で日々を送っていた。661年、ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーン (Mu'āwīya b. 'Abī Sufyān) はウマイヤ朝の初代カリフになった。ムアーウィヤは敵であった第4代正統カリフのアリー・ブン・アビー・ターリブ ('Alī b. 'Abī Ṭālib) の支持者をクーファから追放し、自分の支持者であるシリア、バスラおよびジャズィーラ地方の人々を大規模にクーファへ転入させた。サジャーフはこの人口移動の影響を受け、クーファに移され、イスラームに入信した、という。また、イスバハーニー [1960: 35-37] によれば、ムサイリマが（イスラーム軍に）殺された後、サジャーフはイスラームに入信し、いいムスリムになった。さらに、バラズリー [1987: 138] によれば、ムサイリマが殺された後、サジャーフはタグリブ族のところに戻った。彼女はタグリブ族の間で亡くなった。

イスラーム黎明期のアラブ社会において、夫による通い婚は広く見られた。サジャーフ自身が母方の一族であるタグリブ族のもとで育っていたことは好例として挙げられる。そのため、サジャーフがムサイリマと政略結婚をしたあとタグリブ族へ戻ったことは理解できる。タバリーの伝承が正しければ、サジャーフは当時の情勢および政略結婚を利用し、歳入という形で自分の部族へ利益をもたらした。また、上述した内容から、サジャーフは時機を見ることに長けていたことがわかる。政治情勢を利用してハニーファ族から歳入を受け取ることはいうまでもなく、利益を貪らずイスラーム軍の害を被る前に躊躇なくジャズイーラ地方に戻った。

イスバハーニーによるサジャーフがイスラームに入信したという伝承については捏造とも史実とも考えられる。イスラーム学者あるいは一般人ムスリムがサジャーフの物語をイスラーム価値観に従わせるために、サジャーフがイスラームに入信したという結果を捏造した可能性は大いにある。イスラームの敵までもイスラームに入信したことはイスラームの正しさおよび魅力を証明したということである。また、上述した分析を通じ、サジャーフが時機を見ることに長けていたことが明らかになった。イスラームに入信することにより預言者を自称して反乱を起した罪が許されるのであれば、サジャーフがイスラームへの入信を選んだとしても不思議ではない。

6. 終わりに

全体的に見れば、イスラーム黎明期のアラビア半島で生活を送っていた女性は、男性と比べれば地位が劣っていた。だが、そのような環境にもかかわらず、知恵および手腕がある女性指導者は存在した。本論文の着目点であるサジャーフはその一人である。

彼女はムハンマドの死をきっかけに反乱を起こした。反乱においては預言者およびカーヒナの身分を十分に利用し自分の地位と権威を高め、部族の人々を指導した。そして、同盟者との交渉でサジャーフは巧妙に相手の機嫌をとり、

同盟関係を強化した。換言すれば、彼女は自分の不利な条件を利用し、目的を果たすための道具にした。さらに、サジャーフはムサイリマとの交渉及び政略結婚を通じて、一人の死者も出さずヤママ地方の歳入を獲得し、新しい同盟関係を結んで反乱軍の勢力を伸ばした。その後、時機をうまく読んだサジャーフは利益を貪らず、無事にジャズイーラ地方に戻った。

サジャーフの物語が後世に提示しているのはイスラーム黎明期が女性にとって優しい時代だということではない。彼女の経歴から劣勢に立たされながら手段を尽くして高位、権力および利益を求め、知恵および手腕のある女性指導者像が見える。このような女性指導者像は、女性にも男性と同じような機会が与えられれば、女性が有能な女性指導者になることが可能であると考えられる。

[注]

- 1 イスラーム黎明期が具体的に指す時期をめぐって、研究者の意見は異なっている。後藤 [1993: 217-218] は、ターハー・フサイン (Tāhā Husayn) が著した *Fī al-Shi'ri al-Jāhili* の訳本を補修した際、原著の題名にあるジャーヒリーヤ時代（イスラーム直前の約1世紀間）を「イスラーム黎明期」と変更した。すなわち、後藤からみれば、イスラーム黎明期はジャーヒリーヤ時代を指す。また、'Amīn [1969] による名作の *Fajr al-'Islām*（イスラームの黎明期）では、イスラーム黎明期は初期イスラーム (Ṣadr al-'Islām) からウマイヤ朝の終焉までであると定義されている。ジャーヒリーヤ時代はイスラームの揺籃であり、イスラームの出現と緊密に関連している。また、ウマイヤ朝において、文学や宗教学などの学問が既に大きな発展を遂げたため、その時代をイスラーム黎明期に含めるのは、黎明の意味と矛盾している。したがって、本稿はイスラーム黎明期をジャーヒリーヤ時代から正統カリフ時代の終わりまでであると定義する。
- 2 Lichtenstädter [1935: 10-13, 17-20, 38-45] によれば、その時代における女性の婚姻はアラブ部族間の政治的繋がり (political connections) として利用された。また、戦争が起こる場合、女性は諜報活動を行ったり男性兵士を鼓舞したりして、積極的な補助的な役割を果たした。Lichtenstädter と異なり、Abbott [1941a, 1941b] は女性の補助的な役割だけでなく、女王や偽預言者など指導役を果たした女性らについても議論している。ほかに、al-Hawfi [1963: 430-463] はイスラームの立場からその時代の戦争における女性戦士や女性指導者などの女性を紹介している。
- 3 タバリーはバグダードの著名なウラマーおよび歴史家である。主著『諸使徒と諸王の歴史』は天地創造以来の人類史であり、歴史学の基礎的文献と思われる [清

水 2002]。

- 4 バラズリーは9世紀の最も偉大なアラビア語を使う歴史家 (Arabic historian) の一人である。名著『諸国征服史』はムハンマドの戦争、ムハンマド没後の反乱戦争およびシリア征服などの歴史を記し、アラブ征服の歴史に関する最も重要な史料の一つと思われている [Becker 1986]。
- 5 イスバハーニーはアラブ人歴史家、文学者および詩人である。主著『歌謡の書』は数多くの詩人・歌手の詩を蒐集し、詩人・歌手に関する膨大な情報を記している [Nallino 1986]。
- 6 イブン・アスィールは前近代における代表的な歴史家である。主著『完史』は天地創造から1231年に至る世界史であり、後世の歴史家によってさかんに引用された [谷口 2002]。
- 7 イブン・カスィールはマムルーク朝期のシリアで活躍した著名な歴史家、ハディース学者およびタフスィール (クルアーン解釈) 学者である。天地創造から当時のダマスカスまで書いた歴史書『始まりと終わり』は彼の最も重要な著作と思われる [大川 2002]。
- 8 文法学者のイブン・ユースフ (Ibn Yūsuf, 1309-1360 年) [2001: 58] によれば、サジャーヒのような fa'ālī 式の名前は女性名詞の記号 ('alam 'alā mu'nnath) と思われる。また、このような名前はヒジャーズ地方 (アラビア半島の紅海沿岸部) やタミーム族 (Tamīm) の人々に属するとされる [Ibn Yūsuf 2001: 58]。サジャーヒのほかに、ハザーミ (Ḥadhāmi)、カターミ (Qatāmi) 及ラカーシ (Raḳāshi) という名前が挙げられる [Ibn Manẓūr 1955: 475-476; Ibn Yūsuf 2001: 58]。
- 9 イブン・アスィール [1965: 354] およびイブン・カスィール [2007: 28] は第1種の系譜を選択して記しているが、第2種の系譜を無視する理由について述べていない。
- 10 ここのジャズィーラはアラビア半島の意味を表現せず、ティグリスとユーフラテス両河間の北部地域 (上メソポタミア) を意味する。
- 11 サアーリビー (961-1038 年) はアラブの文学者である。ここで引用される彼の代表作『心の果実』(Thimār al-Qulūb) は逸話の宝庫として知られる [杉田 2002]。
- 12 一部のカーヒンは質問者の言動および状況から予兆を読み、情報を獲得する。また一部のカーヒンは自分が追隨するジン (精霊) に情報を教えられる、という [Ibn Manẓūr 1956: 363]。
- 13 占う際に、カーヒン／カーヒナは主に明白あるいは曖昧な韻文を使い、占いの結果を相手に伝える。
- 14 タグリブ族はラビーン族の支族である。
- 15 父方の系譜によれば、サジャーフはタミーム族の支族であるヤルブーウ族に属する。マールクはヤルブーウ族の指導者である。
- 16 タミーム族の支族である。

- 17 タミーム族の支族である。
- 18 リバーブ族の一部の部族民はタミーム族に入ってタミーム族と一緒に暮らしている。
- 19 すなわち、リバーブ族を守っている防御障地のような天然塹壕がない、あるいは彼らを守ってくれる盟友がいない。
- 20 バラーズリーはタバリーと異なる展開を述べている。バラーズリー [1987: 138] によれば、サジャーフはカーヒナであり、タミーム族とタグリブ族の人々が彼女に追隨している。ある日、彼女は突然、「雲の主（Rabb al-Sihāb）はあんたたちにリバーブ族を攻撃せよと命令した」、と韻文で人々に伝えた。バラーズリーの記述はタグリブ族の部族民がタミーム族のところにいる理由およびイスラーム共同体を代わりにリバーブ族を攻撃する理由について説明しておらず、唐突の感は免れない。バラーズリーと比べれば、タバリーの記述はさらに論理的である。
- 21 ナジュド（Najd, アラビア半島中央部の内陸地帯）における地域である。ムハンマドの没後、ヤマーマ地方に住んでいるハニーファ族（Ḥnīfā）のムサイリマ・ブン・ハビーブ（Musaylima b. Ḥabīb）はヤマーマ地方において反乱を起こした。彼は預言者を自称したため、嘘つきムサイリマ（Musaylima al-Kadhdhāb）というあだ名をつけられた。アブー・バクルはムサイリマが導いている反乱勢力を重大な脅威と見做し、反乱を鎮圧するために軍を派遣した。戦いでムサイリマはイスラーム軍に殺された [Watt 1993; 保坂 2002; Smith 2002]。
- 22 クルアーンの第 16 章第 58-59 節は次のようである。「彼らの一人に女兒（誕生）の吉報が伝えられると、彼の顔は黒く翳り、彼は鬱ぎ込んだ。彼は吉報として伝えられたもの（女兒の誕生）の悪により人目を避ける。恥を忍んでそれを留めるか、それとも土くれに埋めるか。彼らの判断することのなんと悪いことか」[中田 2014: 302]。この 2 節はジャーヒリーヤ時代のアラブ人の女兒に対する嫌悪を示唆している。また、この時代において、父が亡くなれば実母以外の父の妻を娶る慣習が流行っていた。すなわち、女性は財産の如く扱われた。さらに、夫に忠実ではない女性は過酷な引き裂き刑を科された事例もある。詳細に「アラブ人の日々」（ʿAyyām al-ʿArab）の「バラダーンの日」（Yawm al-Baradān）を参照されたい [Ibn al-ʿAthīr 1965a: 506-511]。上述した事例をはじめとする数多くの伝承を論拠とし、イスラーム黎明期において女性の地位は男性より低いと考えられていた。
- 23 サイフ・ブン・ウマルは初期イスラーム史料の編集者である。彼によるムハンマド没後の反乱に関する史料はタバリーによって『諸使徒と諸王の歴史』で引用されている [Donner 1997]。
- 24 イスラーム共同体を代表するクライシュ族はムサイリマの政権を認めないという意味である。

[参考文献]

大川玲子

- 2002 「イブン・カシール」大塚和夫等編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、東京、157.

後藤三男

- 1993 「解題」ターハー・フサイン『イスラム黎明期の詩について』高井清人訳、ごとう書房、東京、217-233.

杉田英明

- 2002 「サアーリビー、アブドゥルマリク」大塚和夫等編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、東京、385.

清水和裕

- 2002 「タバリー」大塚和夫等編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、東京、609.

谷口淳一

- 2002 「イブン・アスィール」大塚和夫等編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、東京、154-155.

中田考監修

- 2014 『日亜対訳クルアーン』作品社、東京.

保坂修司

- 2002 「ナジュド」大塚和夫等編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、東京、702.

Abbott, Nabia

- 1941a “Pre-Islamic Arab Queens”, *The American Journal of Semitic Language and Literatures*, Vol.58 No.1, 1-22.

Abbott, Nabia

- 1941b “Women and State on the Eve of Islam”, *The American Journal of Semitic Language and Literatures*, Vol.58 No.3, 259-284.

ʿAmīn, ʿAḥmad

- 1969 *Fajr al-ʿIslām*, Bayrūt: Dār al-Kitāb al-ʿArabī.

al-ʿAzrāqī

- 2003 *ʿAkhbār Makka wa Mā Jāʿa fīhā min al-ʿĀthār*, Maktaba al-ʿAsadī.

al-Balādhurī,

- 1987 *Futūḥ al-Buldāni*. Bayrūt: Muʿssasa al-Muʿāfā li-l-Ṭibāʿa wa-l-Nashr.

Becker, C.H.

- 1986 “AL-BALĀDHURĪ”, in H.A.R. Gibb etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second Edition Vol.1, Leiden: E.J. Brill, 971-972.

Bevan, A.A. (ed.)

- 1907 *The Naḳāʿd of Jarīr and al-Farazdaq*, Vol.1, Leiden: E.J. Brill.

Bevan, A.A. (ed.)

- 1908-1909 *The Naḳāʿd of Jarīr and al-Farazdaq*, Vol.2, Leiden: E.J. Brill.
- Donner, F.M.
- 1997 "SAYF B. ʿUMAR", in C.E. Bosworth etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second Edition Vol. 9, Leiden: Brill, 102-103.
- Fahd, T.
- 1997 "KĀHIN", in E. van Donzel etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second Edition Vol. 4, Leiden: E. J. Brill, 420-422.
- al-Ḥawfī, Muḥammad.
- 1963 *Al-Marʿa fī al-Shiʿr al-Jāhili*, Bayrūt: Dār al-Fikr al-ʿArabī.
- Ibn al-ʿAthīr
- 1965a *Al-Kāmil fī al-Tārīkh*, Vol.1, Bayrūt: Dār Bayrūt li-l-Ṭibāʿ wa-l-Nashr.
- Ibn al-ʿAthīr
- 1965b *Al-Kāmil fī al-Tārīkh*, Vol.2, Bayrūt: Dār Bayrūt li-l-Ṭibāʿ wa-l-Nashr.
- Ibn Kathīr
- 2007 *Al-Bidāya wa-l-Nihāya*, Vol.7, Dimashq and Bayrūt: Dār Ibn Kathīr li-l-Ṭibāʿ wa-l-Nashr wa-l-Tawzīʿ.
- Ibn Manẓūr
- 1955 *Lisān al-ʿArab*, Vol.2, Bayrūt: Dār Bayrūt li-l-Ṭibāʿa wa-l-Nashr.
- Ibn Manẓūr
- 1956 *Lisān al-ʿArab*, Vol.13, Bayrūt: Dār Bayrūt li-l-Ṭibāʿa wa-l-Nashr.
- al-ʿIṣbahānī
- 1960 *Kitāb al-ʿAghānī*, Vol.21, Bayrūt: Dār al-Thaqāfa bi-Bayrūt.
- al-Maṣʿūdī
- 2005 *Murūj al-Dhahab wa-Maʿādin al-Jawhar*, Vol.2, Bayrūt: al-Maktaba al-ʿAṣrīya.
- Ibn Yūsuf
- 2001 *Sharḥ Shudhūr al-Dhahab fī Maʿrifa Kalām al-ʿArab*, Dār ʿIhyāʿ al-Turāth al-ʿArabī li-l-Ṭibāʿ wa-l-Nashr wa-l-Tawzīʿ.
- Lichtenstädter, Ilse
- 1935 *Women in the Ayyam al-ʿArab*, London: Royal Asiatic Society.
- Nallino, M.
- 1986 "ABU ʿL-FARADJ AL-ṢBAHĀNĪ", in H.A.R. Gibb etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second Edition Vol.1, Leiden: E.J. Brill, 118.
- Shoufani, Elias
- 1973 *Al-Riddah and the Muslim Conquest of Arabia*, Toronto and Buffalo: University of Toronto Press.
- Smith, G.R.
- 2002 "AL-YAMĀMA", in P.J. Bearman etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second

Edition, Vol. 11, Leiden: E.J. Brill, 269.

al-Ṭabarī

1969 *Tārīkh al-Ṭabarī: Tārīkh al-Rusul wa-l-Mulūk*, Vol.3. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif bi-Miṣr.

al-Tha'ālibī

1985 *Thimār al-Qulūb fī al-Muqāf wa-l-Mansūb*. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif.

Vacca, V.

1995 "SADJĀH", in C.E. Bosworth etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second Edition, Vol. 8, Leiden: E.J. Brill, 738-739.

Watt, W. Montgomery

1993 "MUSAYLIMA", in C.E. Bosworth etc. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, Second Edition, Vol. 7, Leiden and New York: E.J. Brill, 664-665.

伊斯兰黎明时期的女性领袖形象 ——以伪先知赛察赫为例——

洪 砺

大量伊斯兰研究，特别是其中的历史研究，将目光聚焦于伊斯兰黎明时期阿拉伯半岛上的女性，探讨其社会地位。然而，此种研究大多同时列举数名女性事例，以求全面。该方法虽能提供多样案例，但停留在宏观视野，缺乏针对女性个体的深度挖掘。本文将伪先知赛察赫作为研究对象。

公元 632 年，先知穆罕默德去世，数个阿拉伯部落趁机掀起叛乱，自称先知的女性领袖赛察赫登上历史舞台。本文首先以赛察赫姓名的含义及其谱系为线索，介绍赛察赫；其次，通过回顾赛察赫自起兵至决定挥兵叶玛麦的经历，分析其获得权力的途径及其与盟友的互动关系；再次，本文通过梳理赛察赫与穆赛里玛进行谈判及政治联姻的过程，探讨赛察赫的政治素质。最后，本文聚焦于赛察赫叛乱的尾声，在探讨其皈依伊斯兰教的有关史料的真实性的同时，继续总结作为女性领袖的赛察赫在叛乱中所表现出的政治素质。

通过对赛察赫有关史料的整理与分析，我们可以发现赛察赫拥有极高的政治智慧。在穆罕默德归真后，赛察赫精确地选择了作为女性也可以拥有的祭司与先知身份，通过掌握神权谋求更多权力。来到塔米姆部落后，赛察赫利用自己的出身及女性身份，巧妙地取悦盟友，以此巩固政治联盟。在挥兵叶玛麦后，通过与穆赛里玛的交涉与政治联姻，赛察赫不但兵不血刃获得叶玛麦的粮食收益，并且通过建立同盟关系再次增强反叛军的实力。最后，赛察赫在被穆斯林军队攻击前于最恰当的时机安全返回母方部落。赛察赫的故事不能证明伊斯兰黎明时期对于女性来说是友好的，但从她的故事中我们可以看到充分运用自己的智慧获取地位、权力与利益，将自己的劣势转变为优势，拥有极强政治手腕的女性领袖形象。而这一形象恰恰证明，如果女性被给予与男性相同的机会，其可以同男性一般成为拥有极高政治智慧、极强政治手腕的优秀领袖。

